

佛蘭西書巡覧 35

平山弓月



パリの街路史を扱った類書は、…大小合せて30点を超える。だがそのなかで質量ともに他を圧しているのは、歴史家ジャック・イエレ畢生の大著『パリの街路史事典』である。

蔵持不三也

世の中には、変人とまでは行かなくても、変わった人々がたくさんいるものです。何か一つのものやことに深い関心を寄せ、それを究極にまで追求せずにはいられない人。このような人々の精華が公にされれば、筆者のごとき凡人の知に大いに資するのです。

本稿で紹介する、**ジャック・イエレ Jacques Hillairet(1886-1984)**という、パリ史を専門とする歴史家が遺してくれた『**パリの街路史事典**』*Dictionnaire Historique des rues de Paris(1963)*は、そのような特異な書物のひとつなのです。初版が出て以来、定期的に何度も再版が出されていることが、この事典の重要性を示す証となっています。

イエレは専門教育を受けた歴史家というわけではありません。彼は本名をオーギュスト・アンドレ・クーシャンといい、パリの郵便局長だった父の影響か、24歳で中央電話局に勤め、第一次世界大戦時には、通信隊に配属されました。職業軍人となり、ソーミュールの騎兵学校で教壇に立った後、陸軍省詰めを経て、第二次世界大戦前夜には、フランス委任統治下のレバノンで勤務しました。第二次大戦には大佐として動員を受けましたが、一年間の捕虜生活の後解放されると軍を退役しました。このように、彼の前半生は、歴史研究とは無関係だったのです。

大戦後はパリに住み、パリの歴史的な側面にひかれ、一転してパリの逸話的歴史の研究に没頭してゆきます。いわゆる講壇歴史家とは違い、好事家、あるいは素人探偵的に、自分の興味関心の赴くままにどんどん深入りしていったのです。乞われて10年後には筆名を使い、3巻本として『**パリ、昔日の面影**』*Évocation du vieux Paris(1951-54)*を世に問いました。幸い好評を持って世に受け入れられ、続く『**パリの昔日を識る**』3巻*Connaissance du vieux Paris(1956)*も、多くの賞を受け、歴史家としての評価は定まりました。1963年に2巻本として、5334の街路名を2343の挿絵、写真とともに収録する『**パリの街路史事典**』を上梓し、アカデミーフランセーズのグランプリをはじめいくつもの賞を与えられました。学問は何も学府だけのものではないとの、明確な証左ではないでしょうか。

私事ですが、ここ15年、パリに行くたびにほと

んど決まってコンスタンティノーブル通のホテルに宿をとっています。そこで、この通りを例に、イエレの事典を引いてみましょう。

Constantinople(rue de)

Ville Arrondissement. Commence pl. de l'Europe; finit pl. Prosper-Goubaux. Longueur 488 m; largeur 15 m.

コンスタンティノーブル通

8区。ヨーロッパ広場からプロスペール-グーボー広場まで。長さ488m、幅15m。

と、概略を述べたのち、この通の歴史が述べられます。

Cette rue fait partie de celles qui, ouvertes, en 1826, par les lotisseurs Hagermann et Mignon(cf. r. d'Amsterdam), formèrent le quartier de l'Europe. D'où son nom de l'ancienne capitale de la Turquie.

二人の分譲業者、アジェルマンとミニョン（アムステルダム通参照）によって、1826年に開かれ、ヨーロッパ地区の一部を形成する通の一部をなす。そこから、トルコの首都のかつての名はここに由来する。

これで、この通の始まりが分かるのです。そして、この通の特徴が示されます。

No 10 --- Emplacement, en 1891, du siège de l'Association de l'ordre du temple de la Rose-Croix, fondée par Joséphin Péladan, dit Sâr Péladan.

10番地 —— ジョゼファン・ペラダン、通称ペラダン殿下が創設した、薔薇十字騎士団の本拠地。

イエレの説明のおかげで、この通りの周辺に、エディンバラ通、ナポリ通、コペンハーゲン通等々の名を冠する通りが存在する理由が分かり、面白く読めます。

この事典の記述は、概ね今見たような体裁をとっています。イエレの事典と、できれば歴史地図をかたわらに、バルザック、ゾラ、フロベール、デュマといった、パリを舞台とする19世紀の小説を読めば、あたかも自身がパリの街中にいるようで、小説世界がさらに身近になるのではないのでしょうか。字面だけを追うのではなく、そろそろ臨場感を持つての読書に身を任せてみてはいかがでしょうか。

ひらやま ゆづき（教授・フランス語・フランス文化論）